

ぶつかるはブーゲンビリアバス走る
パパヤ熟れ富家の塀の赤煉瓦
飲めとある椰子の実をもてあましけり
ストローの動くコップの風は秋
掃苔や実朝政子つぎは虚子
一卓に王家陳家の施餓鬼かな
流灯の夕闇油くさききかな
一湾を狭しと開く花火かな
誘ひ見し野外映画や震災忌
夜の萩を見よとひきとめられにけり
しだれ萩すとんすとんと花落とす
首のぼし蓑虫土に立ちにけり
天高し端山の瘤をつきあはせ

石垣の荒き隙あり秋の風
秋風の庭遠州の名に恥ぢず
きりぎしのまがね光りや籬の秋
落石のひゞきしばしば下り籬
踏みわたる簀が叫ぶなり下り籬
いたづらに築尻震へ鮎落ちず
羽のごと刃をひるがへし林檎むく
簀を走る雨の坊主や菊花展
ぺしゃんこになりたるあはれ菊枕
うらかへしおもてかへしぬ菊枕
栗焼ける乙女は伏目道問はむ

二〇一九年六月二五日